

令和7年度第2回みやぎ観光振興会議仙台圏域宿泊事業者部会 委員等発言要旨

日時：令和7年9月4日（木）午後2時から

場所：フォレスト仙台 第5・6会議室

「1. 宿泊税活用施策案」についての質問や意見等

磯田委員

- 施策の優先順位は、1番（戦略的な観光地域づくり）、2番（二次交通対策）、3番（受入環境整備）、4番（プロモーション）の順である。
- コンテンツ（施策1）を充実させ、集客と売上を上げることが第一歩であり、それがなければ人手不足（施策3）も意味がない。
- コンテンツ実現には二次交通（施策2）が必要であり、プロモーション（施策4）は魅力的なコンテンツを作ってから行うべきである。過去のプロモーションはインバウンド増加につながっていない。

梅原委員

- 具体的な施策内容が不明瞭であることに不安がある。
- 二次交通などの「点と点を線で結ぶ」取り組みの具体的な方法が見えない。
- ハード事業が難しいから、ソフト事業を検討ということも十分分かるが、「宿泊税があるから何をしよう」ではなく「何をやりたいから宿泊税が必要」という本来の考え方に戻るべきである。
- プロモーションは非常に重要であり、これまでのやり方が良くなかったから人が来なかった。
- 今後は有名インフルエンサーの活用など、効果的な「尖った」プロモーションに挑戦すべきである。
- 組合で統計を取っているが、仙台市内中心部の宿泊者数はすべての月で前年比100%超で推移しているが、県内他地域ではそうではない現状があり、地域間格差の課題がある。
- 県全体として、地域ごとの特性やシーズンを活かし、うまく連携してアピールする必要がある。
- 連泊客を増やすためには、県内を周遊してもらうことが重要であり、レンタカー利用の補助（2泊3泊の宿泊者対象）が最も簡単な方法ではないか。

大崎委員

- 黒川地区は観光客よりもビジネス客や工業団地に来る作業者などの長期滞在が主であり、観光地としての認識が低い現状である。
- 長期滞在客が休日にどこかへ行きたいと思った際に、どのように案内するかがポイントとなる。
- 黒川地区は公共交通機関のアクセスが悪く、特に夜間は移動手段がほぼなく、ほとんどの客が車、レンタカーを利用している。
- 黒川地区内には観光地が全くないわけではないが、個々で発信されている状況であり、富谷市など4市町村の行政と連携し、地域全体の観光振興を進める必要がある。

小松委員

- 宿泊税はハードや交通など「形に残るもの」にしっかりお金を使うべきである。
- 一過性のパンフレットや影響力の少ない DMO に使うなど、薄く広くお金をばらまき、霧のように消えてしまうことは避けるべきである。
- 松島では魅力的な場所が松島海岸駅から離れた場所にも点在しているが、二次交通が不足しているため、素敵な場所の周知と合わせて二次交通をセットで考える必要がある。
- （早朝の熱気球体験の例を挙げ）タクシーすら手配できない現状は問題である。
- インバウンドの伸び悩みの原因はアクセスだけでなく他の要因もあり、富士山や北海道のようなへき地でも観光客が多い地域から学ぶべきである。
- 東京から仙台まで新幹線で 1 時間半というアクセスの良さを海外に周知し、仙台到着後の二次交通（レンタカーやバス）の拡充と周知が必要である。
- 東京に滞在中の外国人観光客が、東京から手軽に日帰りや一泊で宮城を訪れるケースがあり、東京からの「おこぼれ」をうまく拾うことができればよいのでは。

櫻井委員

- 日本三景松島をさらに磨き、観光客を誘致するため、「無人島整備」として松島の島々の松枯れ対策や雑木の伐採を行い、昔のような美しい景観を取り戻す活動をしている。
- 松島の「癒しの景観」を再生することで、リピーターを増やしたい。
- 二次交通について、遊漁船などと連携した「海からの二次交通」も可能である。

菅原委員

- 宮城県の認知度が低いことが課題。特に京阪神や欧米圏からの認知度向上に力を入れるべき。
- 今までのプロモーション方法を見直し、SNS などを活用した効果的なプロモーションを推進してほしい。
- イベントに一過性ではなく継続性を持たせるべき。単発で終わらせず、効果が見込めるイベントは実証実験として継続的に実施し、宮城に何度も来てもらえるような内容に昇華させるべき。

原田委員

- 観光やインバウンドだけでなく、学会やスポーツ少年団もターゲットにすべきである。
- 宮城県の観光地は偏っており、周遊する旅行の形になっていない。まずは松島のような主要な観光地を整備すべきである。
- 予算は広範囲に波及効果を生むような使い方をすべきで、中途半端にばらまくべきではない。
- 仙台市ばかりに観光客が集中するのは好ましくない。岩沼市のような地域にも、滞在を促すような観光スポットを整備する必要がある。
- スポーツ少年団のような利用客にもある程度支援が必要。
- スポーツや学会といった分野を個別に考えるのではなく、県全体でトータルに捉えるべきである。
- ただ面白おかしく笑って終わるだけでなく、心に残るような観光体験を県として考えてほしい。

半田委員

- 宿泊税の約 10 億円の具体的な分配方法がまだ示されていない。
- 亘理町では閑散期と繁忙期があるため、閑散期の戦略的な観光地域づくりが必要であり、そのためには市町村との連携が不可欠。
- 亘理町への交通手段はほとんど車であり、町の公共バスは本数と時間が減少しているため、地域に来る手段が年々なくなっている現状がある。
- 個人旅行者が増えている中でレンタカーは良い手段だが、乗り捨てができない。借りる場所と返す場所が限定されるといった課題があるため、地域に乗り捨て可能な拠点を設けるなどの施策があればよい。
- 「胸を張ってプロモーションができる」ように、ハード面の改善が進むような政策を期待する。

林委員

- 最も重要な課題は、「地域独自の魅力創出」である。
- 宮城県内にも良い場所が多いはずだが、地元の人でもその魅力をすべて知らないため、地元の人々が協力して魅力を出し合い、それを知ってもらうことが重要。
- 宮城県の認知度が非常に低い。他県民は東北 6 県を言えず、仙台が宮城の県庁所在地であることも知らない人が多い。まず「見える化」して認知度を上げる必要がある。
- 観光の魅力は自然、文化、歴史、食、体験など多岐にわたるが、どの地域にも必ず秀でた点があるはず。
- 二次交通は、まず「どこに何があるか」を知り、そこに行きたいと思ってから必要になるもの。
- 宿泊税は「形に残り、次に繋がるもの」に使うべき。
- 東京から 1 時間半というアクセスの良さや、東京に泊まるより宿泊費が安いことをアピールし、「東京に用事があるなら仙台に泊まって東京まで新幹線で 1 時間半」というようなアピールも面白いのでは。

磯田委員

- 圏域での施策活用イメージとして、松島の五大堂や瑞巖寺、塩竈の寿司体験、魚市場、塩竈神社、奥松島の震災遺構、多賀城南門、仙台港の水族館、アウトレット、民間施設もあるが、観光客を呼び込むために二次交通を充実させながら、そういった施設をブラッシュアップする必要がある。
- 日中のチェックイン・チェックアウトの間の時間をいかに楽しませるかが重要であり、滞在時間が長くなれば連泊客も増える。
- ナイトタイムや早朝のコンテンツとして、松島の夜のライトアップや健康志向の朝ヨガなどの朝活コンテンツ（福浦島で実施するなど）を提案。
- 「草津といえば湯畑」のように、宮城といえばこれという核となるスポットが必要である。
- 宿泊税は積立が可能であれば、すぐに使うのではなく、貯めて大きなプロジェクトに使うのも良い。
- 松島は文化財保護法により開発が難しい地域（京都と同様）であり、建物の高さ規制などがあるため、国と県、町で連携して規制緩和を働きかけてほしい。

梅原委員

- 震災の経験を風化させないため、それを国内外に伝え、見ていただけるような仕組み作りが必要である。
- 仙台や東北を訪れるインバウンド客は、京都などを訪れる客とは目的が違う。彼らは日本人の暮らしや地域性に興味を持っているため、目新しいものを提供するだけでなく、既存の魅力を磨き上げてPRすべきである。
- 仙台七夕だけでなく、各地域のローカルなお祭りをピックアップしてつなぐような企画も有効である。
- 宿泊のオプションとしてデスクを設け、宿泊客をホテルから送迎してサップ体験ができるようにするなど、宿泊施設と体験プログラムを結びつける仕組みが必要である。

大崎委員

- 各地域で食、お酒、文化、アニメ（聖地巡礼）などの潜在的な観光資源をリストアップすることが重要である。
- 東京から1時間半という交通の便が良いことは利点であるが、裏を返せば1時間半で東京に帰られてしまうことにもつながる。そのため、1日では回りきれない、2泊3泊しないと楽しめないようなコンテンツを作り、滞在を促す必要がある。
- 点在する資源をどう組み立てていくか、行政と連携して検討していくことが必要である。

小松委員

- 松島は夜の時間が非常に弱いため、瑞巖寺などのライトアップ以外のシーズンでもイベント誘致や夜間営業している飲食店・商店への優遇など、夜の活性化策が必要である。
- 人手不足により二食付きを提供できない旅館が増えている中で、夕食を外で食べるシ

システムに対応できるよう、優遇施策を打ち出してほしい。

- 国道 45 号線を通るトラックの渋滞は深刻な問題であり、環境意識の高い欧米の観光客に悪影響を与えるため、高速道路への迂回やバイパス建設など、トラックを街中から通さない方法を検討すべきである。
- 伊達政宗をテーマにした大河ドラマの誘致をお願いしたい。昭和末期の大河ドラマ「伊達政宗」放送時が最も観光客が多かった。
- 松島海岸駅近くにある立派な避難所は、条例により避難所以外の使用が制限され、十分に活用されていない現状にある。道の駅のような施設など、別の用途での利用を検討すべきである。

櫻井委員

- 「“松島湾漁業体験”を宿泊プランとし、松島での連泊観光客を拡大」事業を資料とともに紹介。
- <概要>
宿泊事業者と漁業体験事業者が連携し、松島の絶景を楽しみながら漁業体験を行い、獲れたての海の幸を味わう。松島でしかできない体験をコンテンツ化し、宿泊者数の拡大と連泊を促す。
- <内容>
漁船に乗り松島での漁業体験を提供し、宿泊施設での宿泊プランとして販売。松島栈橋を出発し、季節ごとの多様な漁業体験が可能。獲れた魚をホテルで調理し、夕食メニューとして味わう。
- <アピールポイント>
日本三景松島での観光と漁業体験、地域ならではのコンテンツ、松島栈橋発着のため二次交通不要、2泊以上の連泊が期待できる。インバウンド対応可能。
- <費用>
漁業体験 1 人 5,000 円～8,000 円程度。インバウンド向けプレミアム体験も可能。

菅原委員

- 圏域内の地域特性を活かした体験型観光（櫻井委員の漁業体験など）をピックアップし、それを宿泊につなげ、県内を周遊できる仕組みを作るべき。
- 仙台市で推進中の「アドベンチャーツーリズム」を例に、観光コンテンツのインストラクターを育成し、その指導のもとで多様なアクティビティ（漁業体験、サイクリング、自然体験など）に参加してもらうことで、県内周遊や宿泊につなげられる。

原田委員

- 宿泊税や観光税の使い道に関する県の方針が不明瞭である。県は、まずどのように観光を振興していくかの指針を示すべきであり、その上で、それに沿って民間事業者が具体的な施策を考える体制が必要である。
- 漠然と「こうしたい」というだけでは成果は出ない。県民や関係者が一丸となって協力できるような姿勢を県が示すべきである。
- 県の観光振興に関する窓口が不明確であり、一見してわかるような情報発信が不足している。仙台駅のような主要な場所に、県の観光に対する考え方を示すような情報発信の場を設けるべきである。
- 世の中の状況が厳しく大きな予算をかけられない現状だからこそ、県が中心となって

出席者の様々な考えを一つにまとめ、より良い観光振興策を進めてほしい。

半田委員

- 亘理町ではスポーツ少年団やクラブ活動のための球場などが整備されており、当館でも楽天の元選手や 89ERS（エイティーナイナーズ）のようなチームの合宿誘致など、地域のスポーツ団体との連携による集客に力を入れてきた。
- 予算が分散してしまうのであれば、宮城で一つ大きな「映えスポット」を作るのも良いのでは。
- 昔の「伊達政宗像前待ち合わせ」のように、宮城が「これを推している」という形に残るものを作り、若い世代が宮城に来たくなるような取り組みを求める。

林委員

- 多様な魅力あるコンテンツをジャンル分け（景観、文化財、震災関連、食、体験など）し、興味のある人が選びやすいようにアピールするべき。
- 櫻井委員から発言のあった漁業体験のように、体験型のコンテンツは誘発効果が高い。モデルルート作成なども有効である。
- 県が全てを作るのではなく、努力している民間の取り組みや地元のライトアップ、施設整備などに補助金を出す形も必要なのでは。
- 宿泊税の使い道は多様にわたるが、限られた財源の中で優先順位をつけ、「選択と集中」をすべき。
- 「何に使うか分からなかった」「薄く広くばらまかれ、何もできなかった」という結果にならないよう、明確な使途と効果を求めたい。

磯田委員

- イベントは土日祝日に集中しがちだが、宿泊施設は元々土日祝日は客が多いため、むしろ平日の宿泊対策となるイベントを長期的に行うべきである。
- 有名観光地で国道が走っているところはない。国道 45 号線を通る大型トラックの渋滞は松島の課題であり、観光客が怖がったりするため、対策を検討すべきである。
- 三陸自動車道の一部区間が無料であることについて、宿泊税を払う県内外の観光客にとってのメリットも考慮し、全体的な交通網の改善が必要である。